

久保栄作「林檎園日記」の上演を通じての一考察

—— 劇中の信胤と道子の変化を中心にして ——

A Study through A Performance of Sakae Kubo's "An Apple Orchard Diary"
—— Focusing on Nobutane and Michiko's Psychological Changes in the Play ——

平 井 伸 之*
Nobuyuki HIRAI

I は じ め に

日本リアリズム演劇の巨匠であり、没後60周年となる北海道ゆかりの劇作家久保栄の「林檎園日記」*¹の上演や関係講演、回顧展を2018年6月18日（月）から24日（日）まで、北翔大学北方圏学術情報センターポルトで行った。久保栄作品上演実行委員会が主催となり、久保栄の功績を再評価するとともに、地域住民に久保作品の鑑賞機会を提供し、久保を多角的に紹介する趣旨である。「林檎園日記」は、日中戦争の戦線が拡大しつつあった1937（昭和12）年頃、北の都郊外（札幌平岸）の林檎村を舞台に没落していく安部林檎園の家族を中心とした登場人物の葛藤や思いを描いた作品である。筆者は中心登場人物である「^{のぶたね}信胤」を演じる機会を得た。

まず、「林檎園日記」が書かれた時代を概括してみる。久保は1940（昭和15）年8月に治安維持法違反で検挙、勾留され1年半後に保釈される（新劇事件）が、嚴重な観察処分下での生活を余儀なくされる。多くの芸術家が積極的に、あるいは生活のため戦争に協力していく中で、久保は沈黙を貫いた。当時の心境について久保は「(略)・・・おのづと胸に浮んで来たのは、何とかして筆をよごさずに、ここ何年かの嵐をやり過ぎさう、しかもその期間を、仕事の上で空白にすまいといふ、ただ一つの願ひでした。*²」と書いている。この時期の仕事の一つとして「林檎園日記」の草稿が書かれているが、「(略)・・・反ナチや厭戦を主題の一部とするやうな戯曲を、セリフの隅々までかつちり書き切ることも出来かねましたし、うつかり手もとに置いておくと、何かの時に証拠品にされさうでもあつたしする・・・(略)*³」ので、よそに預けてあった草稿を取り戻し、1946（昭和21）年末ごろに完成させたとある。敗戦により戦時体制から、進駐軍によるファシズム解体のための民主主義のいわば移植が行われ、多くの芸術家は手放してこれを歓迎し、熱狂した時期である。久保はそのような風潮に懐疑的であった。「(略)・・・戦時中の如何わしい行動を、率直に大衆の前に自己批判することなく、俄かに文化運動の指導者を気どり始めた人たちが、それへの盲従者・・・(略)*⁴」と「林檎園日記」の批判者たちについて記している。久保が何を考えどう行動したかは、井上理恵氏*⁵の著書「久保栄の世

* 北翔大学短期大学部ライフデザイン学科

界*⁶」中の『「林檎園日記」の復権』等の論文に詳しい。興味のある方はぜひ一読をお勧めする。

人間の意識や行動はその人間の生きた時代に規定される。芸術作品も同様である。「林檎園日記」は、久保の問題意識が反映された「芸術家の戦争責任」、あるいは「個人の戦争責任」を重要な主題とする作品となった。初演は1947（昭和22）年3月帝国劇場において、久保らが中心となった東京芸術劇場の第二回公演であった。興行的には成功せず、「林檎園日記」以降、東京芸術劇場は解体、久保が戦後リアリズム演劇の表舞台に再び登場することはなかった。

II 「林檎園日記」の登場人物について

「林檎園日記」は四幕構成の戯曲であるが、第一幕は安部林檎園の三代目当主が鉱山経営に手を出すが失敗し、第一次世界大戦後の好況期に取得した園地と母屋を売り払い、旧母屋に引っ越す場面から始まる。まずは、登場人物について概観してみる。

寿々^{すず}は安部家初代当主の娘であり、正義^{まさよし}、信胤の母である。安部家はこの林檎村の草分けの家柄である。寿々の父初代当主百人^{ももんど}は移民の指導者である世話方としての功績から、官給地を支給される際にくじ引きなしで一番便利な土地を割り当てられ、この村に林檎栽培を導入した人物でもある。村の用水路は百人^{ももんどぼり}にちなんで百人堀と名付けられた。寿々のこの家柄への誇りと父への思いが、「(略)・・・自分が今日まで生きて来たのは、ひとへに官の御恩によるのだから、自分の死後も、この場所だけは決して動いてくれるな・・・(略)*⁷」との遺言を頑なに守ることとなり、息子正義が新たな栽培法を導入しようとするのを「官から頂いた土地だけは、もとのまんまにして置いてくれ*⁸」と許さなかった。草分けとしての誇りに相反して没落していく安部家の功績は忘れ去られ、村では「ももんど堀」を「ひやくにん堀」と言い換えて呼ぶようになり、一家は苦々しく思っている。

正義は寿々の長男で安部家三代目当主である。二代目が早逝したため比較的早くに家督を継いだ。その時代（大正後期から昭和初期）は慢性的な不況であった。正義は果樹組合に青年団を組織し、内地に新栽培法の見学に行ったり、シンガポールに林檎の試験輸送をしたり、ウラジオストックに販路拡大を試みるなど、林檎村全体の発展のために尽力する。ところが、当の安部林檎園では寿々の反対にあって、新栽培法への切り替えを断行できずにいた。隣家の上田家など後からの移住者が事業を拡大していく様子を見せつけられ、焦燥にかられた正義は関係を持っていた女人夫の父親と共に鉱山経営により一旗挙げようと出奔するが失敗する。上田家の息子幸彦^{ゆきひこ}と正義の娘道子^{みちこ}は、かつて両家がほぼ同格であったころ親同士で結婚を約束した仲であった。

信胤は寿々の次男で正義の弟である。作家志望で東京の出版社に勤めながら作家修行をしていたが、出版社を辞めて故郷に帰ってきている。ここ数年かけて執筆した原稿を出版しようと東京に送るが、採用されず突き返されている。急速に軍国化が進む世相を憂いつつも、世に出

るため懸賞に応募しようとして、安部林檎園を題材にした戯曲を執筆している。また、寿々に請われて「安部百人伝」を構想中である。文学友達で中国に出征した高須の妹である志津子^{しづこ}を愛している。

道子は正義の娘で父親思いの働き者である。一家の誰より安部家の没落に心を痛め、大好きな父親が戻ることを願っている。「林檎園日記」とは、各幕前に朗読される道子の日記のことである。日記には、季節ごとの林檎園での労働、家族に対する思い、林檎に恐ろしい被害をもたらすモニリヤ病（キノコの胞子が繁殖し林檎の葉や花、実を腐らせる病気で一旦発生すると村中が被害を受ける。）のことなどが飾らない言葉で書かれ、何より道子が林檎園を愛している様子が伝わってくる。

源三郎^{げんざぶろう}は、安部家と同じく開拓当時の草分けである遊佐家三代目当主である。源三郎の妹は故人であるが、正義の妻として安部家に嫁いでいる。遊佐家も安部家同様に没落し、くじ引きなしで割り当てられた官給地を山際の安い土地と買い換え、再出発すべく努力している。

幸彦は安部家の隣家である上田家の息子であり道子とは許婚の仲である。上田家は土地の習慣に拘らずに新しい経営方法を導入し、動力や馬を使い林檎園を大きくしてきた。没落していく安部家に尊大な態度で接し、安部家が土地を手放す際も裏から手を回し自分で使うこととしたり、モニリヤ病の発生源は安部家であるとの噂を流すなど、なりふり構わぬ成り上がりの家柄として描かれている。幸彦は大学生で、ヒトラーユーゲントを批判するなどインテリとしての一面を持つが、大学では石油不足を解消しようとする国策である石炭液化の研究をしている。

志津子は信胤の文学友達である高須の妹で進歩的な職業婦人である。志津子は信胤を愛しており彼女の一途な愛が、信胤に大きな影響を与える。彼女は婦人会で書記の仕事をしているが、会員の積立金を独善的な戦争協力のために使おうとする幹部の考えとそれを許してしまう組織に違和感を持っている。彼女の兄は中国へ出征したが、最後まで信胤の今後の作家としての仕事を気にかけていた。

今朝吉^{けさきち}は安部家の常雇い人夫で正義の信頼が厚く、正義の不在中の林檎園経営を任されている。内地出身で、内地から戻った際にモニリヤ病の菌を服につけてきたと濡れ衣を着せられている。彼は密かに道子を愛している。

継男^{つぐお}は正義の息子で家督を継ぐ立場であるが、信胤が戻ってきたことで立場が不安定になったと感じ信胤に敵愾心を抱き、林檎園経営に興味を失っている。ヒトラーユーゲント来道時に支笏湖畔で行われるキャンプに選抜されることだけを楽しみにしている。

トメは安部家の常雇い人夫、明るく働き者で道子と仕事を共にしている。正義と出奔した女人夫は、トメとは従姉の間柄である。

以上が主要な登場人物である。日中戦争当時のマクロな社会的状況と、マクロに包含されその影響下にある安部家、遊佐家、上田家のミクロな状況が緻密に設定され、安部家の家族とそれを取り巻く人々の立場や思いが、劇の進行と共に浮かび上がってくる。次章以降では、各幕

での信胤と道子の変化を中心に触れていくこととする。

Ⅲ 第 一 幕

季節は初春，雪解けのころ，安部家では旧母屋への引っ越しに忙しい。正義が鉱山経営に失敗した損失の穴埋めのため，園地の一部を売り払い，開拓当時の官給地を一回り大きくしただけの林檎園になったのだ。

第一幕では様々な情報が示され，後の伏線となっている。冒頭の立ち働く道子，継男，トメの様子から，働き者の道子，頼りない継男，しっかり者のトメの人物像が見て取れる。信胤が東京に送った原稿が送り返されてきて，彼が無名作家であることがわかる。作家志望の信胤を継男が揶揄するエピソードが挿まれ，継男が信胤に悪感情を持っていることが示唆される。町に出かけていた寿々が志津子を伴って帰ってくるが，志津子の用向きは寿々と婦人会の様子を話すためと，信胤に兄の出征の様子を報告するためであった。正義を伴い帰ってくるはずの信胤が一人で戻ってくる。登記のためヤマを降りてきた正義を連れ戻すべく，親戚の源三郎と登記所に出かけていたのだが，源三郎に後を託し先に帰ってきたのだ。すると，道子と隣家の上田家の人夫との間に，去年のモニリア病の発生源はどちらの家だったかの言い争いが始まり，今朝吉が止めに入る。すぐに幸彦が詫びのため訪れるが，今回売った土地が実は上田家で使うことになっているという残酷な事実が告げられ，安部家と上田家の関係が明示される。

ここで，人物の出入りが激しかった舞台が落ち着き，寿々と信胤，志津子との会話が展開する。図らずも「ももんど堀」を「ひやくにん堀」と読んでしまった志津子を信胤がとりなすことで，寿々の昔語りが始まり，開拓時の様子が描写される。寿々の台詞の一部を引用してみる。

(略)・・・始めは開墾の奨励に，土地のほかに，お米と味噌醤油を，向う三年間，官から支給されて，それで満期までに土地を耕しおほせれば，自分のものにしていいといふことだったので，期限内にはなかなか拓き切れませんし，当座は何を作っても出来た土地も，二三年目には，ばったり作物がとれなくなりますし，扶助給与が切れてからは，てき面に衣食にも困るししましてね，せつかくの移住者が，散りぢりばらばらにならうとした時に，やっと果樹栽培といふことを，うちの父が考へつきましたね，それでかういふ形の，林檎園ばかりの村になりましたんださうですよ。・・・(略)*⁹

最後に，源三郎が登場し結局正義を連れ戻すことが出来なかったことを告げる。寿々と同じ草分けの家柄としての誇りと意地が，正義をして恥を忍んで故郷に帰ることを許さなかった。それなら自分が連れ戻すと家を出ようとする道子を，「睨まれますよ。・・・(略)・・・お父さんに睨まれるんぢやないのだよ。・・・(略)・・・おばあさんは千里眼だから，行つてみなくとも，よく分かる。お父さんのそばについている女のひとにだよ。*¹⁰」と寿々が諭し，道子は立ちすくむ。

第一幕において信胤は終始、傍観者として存在している。登記所に正義を連れ帰るために出かけた際も、その仕事を源三郎に押し付け先に戻ってきている。正義に鉱山を諦めるよう説得するのは信胤の役割であるはずだが、安部家の没落を目の当たりにしてあまりにも執着がない。彼の最大の関心事は作家として身を立てることであり、志津子に今の仕事について、「(略)・・・うちの林檎園を題材にして、一つ和製の『桜の園』を書いてやらう・・・(略)*11」と自嘲気味に語っている。一方、道子は父親が風呂好きなのに風呂桶が壊れていること気にし、昔の写真を見せようと帰りを心待ちにする優しい娘として描かれている。彼女の望みは、大好きな父親と共に林檎園を立て直すことだけとあってよい。しかし、父親に情人がいることを知らされ、父親には父親の世界があり、かつての父と娘の関係に戻ることは出来ないことを悟るのである。

また、第一幕では時代背景としての戦争の足音が描かれている。冒頭、寿々が出かけていたのは出征兵士の見送りのためであったし、林檎村近隣まで工場が増えてきたとの話題も、戦争遂行のための軍需増加を示唆している。鉱山開発の話題も戦争と密接な関係がある。

IV 第 二 幕

季節は初夏、林檎の花盛りのころ、ヤマに行ききりになっていた正義を伴って信胤が帰宅する。一家は源三郎を交えてささやかな宴席を設ける。正義から今度は硫黄鉱山を手掛けようとしていることが家族に告げられる。何とか正義を思いとどまらせようと、源三郎はかつて林檎村のリーダーとして尽力していたころの正義の思い出話を持ち出すが、必然的に一家の没落の原因に触れてしまう。林檎園を抜本的に立て直すために新栽培法を導入しようとするが、母寿々に反対され嫌気のさした正義は家を出たのだ。

正義と寿々の間が険悪になったところで、道子が正義に園地の買い替えの許可を求める。正義が家に帰りたくないのなら帰らなくてよい。代わりに源三郎と同様に山際の安い土地に買い替え一からやり直したいという道子に、寿々は断固として官給地を手放すのは許さないと言った。泣き出す道子、自身の不甲斐なさにいたたまれなくなった正義はヤマへ帰っていき、道子は泣き続ける。

第二幕では、没落という事態に向き合う登場人物の対比が鮮明になってくる。鉱山で一旗揚げ一攫千金によって解決しようとする正義、安い土地と買い換え再出発する現実を見据えた生き方を選択した源三郎。林檎園の存続を願い健気に働く道子、帰郷した信胤に家督を奪われるのではないかと恐れヒトラユーゲントに熱狂する継男、一家の行く末を心配しつつも傍観者でしかない信胤。

第一幕の終わりで、家を出た父には自分の知らない世界があることを知った道子は、大好きな父と決別しても林檎園を守り続けようと決意し、園地の買い替えを申し出たが、誇り高い寿々は道子の願いをどうしても聞き入れることが出来なかった。林檎園を立て直すためならどんな苦勞もいとわぬという道子の願いは却下されたのである。泣き続ける道子は、自身の努力では安部林檎園の没落を救うことが出来ないことを悟ったのである。

V 第 三 幕

季節は初秋、林檎の収穫の始まるころ、日照りが続いている。幸彦が土間で信胤と話し込んでいる。彼は道子のことが気になるのだ。そこに青年団の代表となりヒトラユーゲントとのキャンプに出掛ける継男が意気揚々と入ってくる。得意の継男は使用人であるトメの父親に難癖をつけ始め、信胤と口論になり、もう家には帰らないと捨て台詞を残し出ていく。道子は、その場に居合わせた幸彦に「あのね、幸彦さん、あなたはもう家へ遊びに来ないでちやうだい。なぜわたしがさう言ふか、分るでせう。あなたのとこと家とは、もう以前とは違ふんだし、わたし、うちのゴタゴタを、よその人にあんまり見られたくないのよ。^{*12}」と告げる。

継男との口論の後、黙り込む信胤と、明るく振る舞う道子対比される。二人の心理をどのように解釈したらよいだろうか。信胤はインテリらしく戦争を批判する発言を繰り返すが、一方では作家として世に出るため国策に迎合した作品を書き懸賞に応募しようとしている。得意になってユーゲントを礼賛する継男の行為と、懸賞に応募しようとしている自分の行為の間に、本質的に差がないことをかみしめていたのではないだろうか。しかし、彼は作家でありたいのだ。自身の戯曲の参考になればと、何気なく手にした道子の日記を読んでいるところを見つけ道子に叱責される場面が挿入される。一方、道子は家同士で決めた結婚相手である幸彦に、咄嗟のことではあったが別れの言葉を告げる。幸彦と決別することで初めて、自身の前提であった「家」に反抗したのだ。無意識的にはあるが、道子は個としての自立に一步を踏み出し、だからこそ清々しい気分で明るく振る舞ったのではなかろうか。

続いて、中国で戦死した兄の信胤への遺言を携えて志津子が訪ねてくる。その遺言は「(略)・・懸賞作家になるより、大作家になれ、無名の大作家といふものもある・・(略)^{*13}」というものだった。作家として身を立てるには戦争協力するほかない時勢に絶望し筆を折り、潔く応招し戦死した兄の思いが今になって分かれると後悔する志津子は、信胤に懸賞に応募などしませんよねと確認する。自身の矛盾の核心を突かれた信胤は、ここ数年がかりで書いた原稿が東京の出版社から送り返されて来たばかりで、今は何も書いていないと嘘をつく。安心した志津子は、返された原稿を是非読みたいと申し出る。原稿を受け取り帰ろうとする志津子、自身の



舞台写真1 (撮影：岩男里奈)



舞台写真2 (撮影：岩男里奈)

嘘と一途な志津子の思いにこらえきれず信胤は告白する。「あの、僕も、やっぱり精神文化連盟の懸賞に応募しようとして、現に昨夜まで、毎晩、書いてるんです。・・(略)・・志津子さん、どうか僕を軽蔑してください。*14」と。

VI 第 四 幕

季節は初秋、林檎の収穫の盛りのころ、硫黄鉱山が一段落したと正義がひょっこり帰ってくる。正義は寝静まった家から登記書類を持ち出そうとするが家族に見つかってしまう。正義は硫黄鉱山に失敗し、借金返済のため残った土地も母屋も手放すことになることを告白する。泣きじゃくる道子、落胆する寿々と無言の正義に、信胤は昨日源三郎の家で見つかった資料から開拓当時の初代百人らの労苦を語り慰め、一家は静かに没落を受け入れる。

筆者は戯曲を読み込む際に、初代百人の遺言が「(略)・・自分が今日まで生きて来たのは、ひとへに官の御恩によるのだから、自分の死後も、この場所だけは決して動いてくれるな・・(略)*7」であることに違和感を抱いていた。果たして彼が官給地をそれほどまでに有難く思っただろうか。百人は士族の出であり、薩長方が動かす明治政府に従うくらいならと、新天地を拓くため集団移住してきた人物である。寒冷地での開墾が思うように進まず、開墾奨励の政策である官から土地の支給を受ける決断は、彼にとって薩長に膝を屈する思いだったに違いない。一方で明治政府の行う政策が、意外とまともで困惑したとの述懐も残している。百人は家族や移住者の生存と存続のため、苦悩しながら明治政府を受け入れた人物なのである。したがって、彼の遺言は言葉そのままに受け取るべきものではなく、彼が官給地にこだわった経緯に思いを馳せるべきであった。家族は初めて百人の思いを共有したのである。時既に遅かったのであるが。

一家を心配する源三郎が登場し、家族の行く末が、静かに決まっていく。常雇い人夫である今朝吉には、内地に親戚の伝手で耕せる土地に心当たりがあった。密かに道子を思う彼は道子に同行してほしいと願っているが、身分の差を気にしてなかなか言い出せない。そんな今朝吉を家族は後押しし、道子は同意する。道子は家が決めた結婚相手の幸彦ではなく、寡黙だが働き者で、林檎園を支えてきた使用人の今朝吉を選んだのだ。寿々と継男も道子に同行すること



舞台写真 3 (撮影：岩男里奈)



舞台写真 4 (撮影：岩男里奈)

になる。信胤は労働者として林檎村に残ることを決意する。

朝になり人夫たちが集まり始め、志津子が借りていた原稿を信胤に返すために立ち寄る。信胤は一家が土地を手放すことになったこと、自分は林檎村に残り、今度手に入れた開拓当時の資料を基に今何より書きたい作品である「安部百人伝」を書き上げる決心をしたと告げ、志津子とその兄に感謝の念を語る。芝居は懸賞に応募しようとしていた原稿を、志津子と道子を前にして信胤が焼き捨てる場面で静かに終わる。

Ⅶ お わ り に

終幕で、信胤は林檎村に残り無名作家として生き続けることを決意するのであるが、彼の決意に至る心理を考察してみる。第三幕で志津子の兄の遺言と彼女の思いに動かされた信胤は、懸賞への応募を思いとどまる気持ちになったのは間違いない。一方で彼は第四幕の始まりでは新たに見つけた開拓当時の資料を手に入れている。資料にある事実としての記録の重さに圧倒された彼の興味は、安部林檎園を題材とした自作から、構想していた「安部百人伝」へと移ったのではないだろうか。懸賞に応募するためには、没落に瀕した家族が一致団結して苦境を脱するという時勢に合った明るい結末にしなければならない。そのような作品を書くより、自身が本物と思う作品を書きたい、資料を手に入れた今なら書けると彼は思ったのだ。以上のような背景があり、正義が硫黄鉱山の失敗を告白し、安部林檎園の消滅と一家離散が決定的になった時に、信胤は決断したと筆者は考える。作家として戦争協力となる行為は決してするまい、そのためには一生無名作家であっても構わないと。これまで、ただ迷うばかりであった信胤は、自分の道へ踏み出そうとするのである。

続いて、道子の心理についても考察してみる。彼女は安部家を立て直すことだけを願うが、第一幕で頼りにしていた父をあてにすることはできないと悟る。ならば独力でと第二幕で園地の買い替えを提案するが寿々に却下される。安部家を救おうと孤軍奮闘する彼女の行為は、常に当の安部家に阻まれる。第四幕で安部家の没落が決定的であることを告げられ、道子は激しく泣く。彼女の涙は、愛しい安部家への決別の涙であった。道子の行く末について考えてみると選択肢は三つあった。第一は幸彦と結婚し上田家に入ることで、第二は源三郎を頼り安部家の存続の道を探ること、第三は今朝吉と一緒に内地に行くことである。道子は第三の道を選んだ。既に「家」と決別した彼女は、いつも陰から彼女を見守ってきた今朝吉との再出発を選択したのである。

「林檎園日記」では、綿密な調査に基づく林檎園経営の様子と日本の近代化と戦争との関係を背景に、いわば類型としての人物たちが描かれている。当時、多くの正義のような人物は存在しただろうし、源三郎や信胤など他の登場人物も然りである。類型としての人物たちの思いや葛藤を通じて自然に主題が浮かび上がってくる。このような作品では、時代背景、空気、世相、類型としての役の立場を理解しなければ舞台にリアリティを醸し出すことは出来ない。更に言えばリアリティのある舞台を現出させることが出来た時に、観客は時代を超えた人間の普

遍性を感じ、多様な解釈が可能となる。この物語を弱々しい信胤が何とか個を確立しようとする話と捉えることも出来るし、道子の姿に女性の自立を重ね合わせることも出来る。戦争の泥沼に入り込みつつあった当時の日本に、現代の日本が抱えるある種の危うさとの類似を感じることも出来るのである。

[文献・出典]

- * 1 発行：「久保栄研究」発行所（2004年11月30日復刻）の「林檎園日記」を台本とした。
- * 2 前出「林檎園日記」：巻末に P182から引用。
- * 3 前出「林檎園日記」：巻末に P186から引用。
- * 4 前出「林檎園日記」：巻末に P189から引用。
- * 5 井上理恵氏：近現代演劇・戯曲の研究者。桐朋学園芸術短期大学特任教授，日本演劇学会理事・副会長。著作に「近代演劇の扉をあける」（1999年・社会評論社），『久保栄 火山灰地』編 解説・解題」（2004年・新宿書房），「木下順二の世界」（2014年・社会評論社），「川上音二郎と貞奴 明治の演劇はじまる」（2015年・社会評論社）など多数。今回の「林檎園日記」上演に際しては、「二一世紀に生きる久保栄－『林檎園日記』の今」と題して講演をいただいた。
- * 6 井上理恵著（1989）：久保栄の世界 社会評論社
- * 7 前出「林檎園日記」：第二幕 P66から引用。
- * 8 前出「林檎園日記」：第二幕 P63から引用。
- * 9 前出「林檎園日記」：第一幕 P29から引用。
- * 10 前出「林檎園日記」：第一幕 P37から引用。
- * 11 前出「林檎園日記」：第一幕 P30から引用。
- * 12 前出「林檎園日記」：第三幕 P77から引用。
- * 13 前出「林檎園日記」：第三幕 P85から引用。
- * 14 前出「林檎園日記」：第三幕 P93から引用。

（付記）

本研究は，平成30年度北方圏学術情報センターの助成を受けて行われている。